新聞で学ぼう

千羽鶴 世界に羽ばたく

アメリカのオバマ大統領が広島市を訪れたときに贈った折り鶴が話題になっています。きっかけとなったのは、原爆による白血病のため、12歳で亡くなった女の子の物語。「病気が治りますように」と折り始めた鶴は今、平和を願うシンボルとして世界に羽ばたいています。

（川合道子）

上オバマ大統領が小中学生に手渡した折り鶴　下大統領の演説に立ち会ったり、折り鶴を受け取ったりした子どもたち＝広島市の中島小学校で

なるほどランド

1 平和願い　オバマ大統領が手作り

アメリカのオバマ大統領が広島市の平和記念公園を訪れた五月二十七日、近くの中島小学校に通う六年生五人は、原爆資料館で大統領を出迎えたり、演説に立ち会ったりしました。

矢野将尊君は資料館を見学したオバマ大統領から、和紙で作られた一羽の折り鶴を受け取りました。「とてもきれいな鶴でした。手伝ってもらったそうですが、平和を願って一生懸命折ったのかなと思うと、うれしい気持ちになりました」と振り返りました。

ほかの四人は、原爆で被爆した人たちの近くで演説を直接聞きました。「大統領が被爆者の方を見て、語りかけるように演説していたのが心に残りました」と竹本沙代さん。福岡拓巳君は「ぼくたちは平和の大切さを未来に伝えるメッセンジャー」と気持ちを新たにしていました。

五人の小学校では毎年夏に全校で千羽鶴を作り、原爆の犠牲になった児童や教師の慰霊碑にささげています。「鶴の折り方が分からない一年生には六年生が教えています」と大亀ひなたさん。記者が訪ねた日は大統領から鶴をもらったお礼にと、アメリカに贈る千羽鶴の一部を折りました。亀田悠真君は「ぼくたちにとって、折り鶴は広島のシンボルのようなもの。折るときは特別な気持ちがします」と話してくれました。

下昔を振り返る高橋登代子さん（右）と中村ゆきゑさん＝愛知淑徳高校の卒業生たち＝名古屋市で　上折り鶴を贈った当時の写真

2 像の少女　治ると信じ 折り続けて

六月中旬、平和記念公園に立つ「原爆の子の像」の前では、修学旅行などで訪れた小中学生たちが、色とりどりの千羽鶴をささげていました。

台座の上で、折り鶴を空高く掲げる少女のブロンズ像。モデルになったのは、佐々木禎子さんという女の子です。二歳で原爆に遭い、十年後の小学六年生のときに突然、白血病を発症。八カ月後の一九五五年十月、短い生涯を終えました。まだ十二歳でした。

禎子さんは病院のベッドの上で「鶴を千羽折ると病気が治る」と信じ、薬の包み紙などで鶴を折ったといいます。

きっかけは、見舞いの品として病院に届いた千羽鶴。贈り主は愛知淑徳高校（名古屋市）の

佐々木禎子さんをモデルに建てられた「原爆の子の像」＝広島市の平和記念公園で

青少年赤十字団に所属していた女子生徒たちでした。

団長で高校二年だった高橋登代子さん（七七）は「今のような折り紙がない時代。みんなで紙を集めるところから始めたの」と振り返ります。包装紙の切れ端やキャラメルの包み紙、文具店を営む友人の家から調達したセロハン。

当時は千羽鶴が禎子さんの元に届いたとは思いませんでしたが、四十年以上たって人づてに知りました。七年前には、初めて会った禎子さんの兄・雅弘さんから「セロハンの鶴が光に当たってキラキラしているのを禎子が『きれい』と眺めていた」と聞き、団員だった中村ゆきゑさん（七七）は「やっぱり私たちの鶴だったのね」と確信したそうです。

3 年に10トン　ノートやはがきに〝変身〟

愛知淑徳高校の生徒たちが広島に千羽鶴を贈って約六十年がたちました。病床で鶴を折り続けた禎子さんの生涯は本などで世界に広まり、千羽鶴は平和のシンボルとしても知られるようになりました。

高橋さんは「一羽一羽が小さな種となり、オバマ大統領の鶴にもつながったのかなと思うと、思いがけないことですが、本当にうれしく思います」と笑顔で話しました。

原爆の子の像には、今も日本や世界各地から千羽鶴が寄せられます。その量は、一年間で十トンにも上るそうです。

ところで千羽鶴は、その後どうなっているのでしょう。

「手作業で色別に分け、千羽鶴再生紙」に生まれ変わっています」と一般社団法人「千羽鶴未来プロジェクト」事務局長の吉清有三さん（六七）。

原爆資料館で入館者に配られるポストカードをはじめ、レターセットやノート、名刺などに〝変身〟。四月に広島市であった先進七カ国の外務大臣が集まるサミットでは、関係者たちが使うリポート用紙やメモ帳にもなりました。

平和への願いがこめられた千羽鶴は、姿を変えてもなお、世界に羽ばたき続けているのです。